

汚染水海洋放出決定 怒りの声

政府が13日、東京電力福島第1原発で発生する放射能汚染水を処理した後の高濃度のトリチウム(3重水素)を含む汚染水(アルプス処理水)の海洋放出方針を決定したことに對し、抗議や撤回を求める声が上がっています。

漁師が永遠に使う海だ

福島・新地町の漁師、小野春雄さん。勝手な政府の決定に、はらわたが煮えくり返る思いです。コロナで苦しんでいるところに汚染水が襲なり、耐えられない。菅首相の会見を見たが、作文を眺んでいるだけで漁民への思いは感じられなかった。所信表明演説で言った

「国民に寄り添う」という姿勢もない。今も福島沖の魚が隣県より2〜3割安い理由を考えたい。政府は漁民の理解を得ず海洋放出はしないと約束していたのに、実際はコロナ禍の去年



シラウオ漁で使う網の手入れをする小野春雄さん(10日、福島県新地町)

に小規模な説明会をやっただけ。何の説明も



反原連が緊急抗議

官邸前

首都圏反原発連合(反原連)は13日、菅義偉政権が東京電力福島第1原発事故の放射能汚染水を海洋放出する方針を決定したことに對し緊急抗議を首相官邸前で行いました。反原連は活動休止中でしたが、菅内閣の暴挙に對して緊急行動を呼びかけました。参加者は、ドラムのリズムに合わせて「海洋放出、

「海洋放出絶対反対」「国民の命をちゃんと聞け」と叫ぶ人たちが13日、首相官邸前

絶対反対」「海を汚すな」「漁業を守れ」「漁連や地元の声を聞け」「勝手に決めるな」と断りました。福島市から駆けつけ

た草野空さん(26)は「国は『関係者』の合意なしにいかなる処分もしない」と約束をしていますが、でも『もう海洋放出しかない』

と国の方針を押し付け、県民と意見を交わすものではありませんと批判。もっと丁寧にならねば、国民の声も聞かれない。代替案も出されていません。国の責任で国民的な議論をするべきです」と語りました。

議論もされていない。遠に使い続ける海で15歳で船に乗って54年間漁師をやっている金で補償するからいい、福島沖の海は私たちが仕事場であり生きる場です。これからも永遠に使い続ける海で苦しんで苦しんで取り続けているのか、何も理解せず「福島の復興のため」なんて軽々しく言うてほしい。

全漁連が 抗議声明

全国漁業協同組合連合会は13日、政府が東京電力福島第1原発で発生する高濃度のトリチウム(3重水素)を含む汚染水(アルプス処理水)を海洋放出する方針を決定したことについて「到底容認できるものではない」とする抗議声明を發表しました。

声明は岸会長名で公表。その中で、岸会長らが7日、菅首相と会談し「反対の考えはいささかも変わらない」と申し入れたにもかかわらず、「本方針が決定されたことは極めて遺憾」と強調

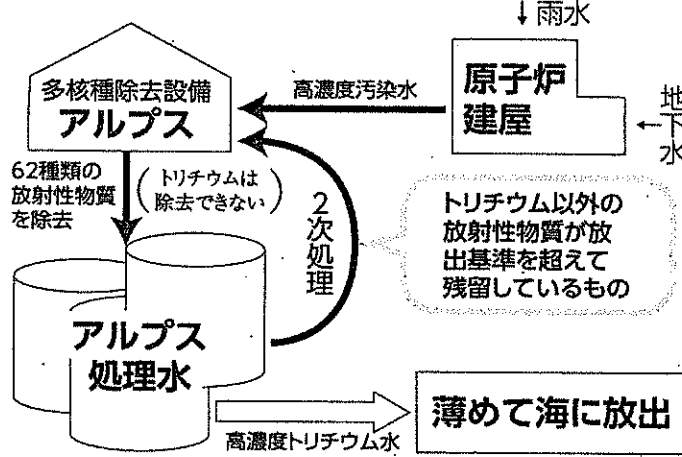
漁業者の思い踏みにじった

さらに、政府がこれまで「アルプス処理水について関係者の理解なしにはいかなる処分も行わないことを明確に回答していた」と指摘。「なぜ関係する漁業者の理解を得ることなく、この回答を覆したのか、福島県のみならず全国の漁業者の思いを踏みにじる行為である」とまぎびく批判しました。

声明ではこのほか、トリチウムの半減期(12・3年)を念頭に敷地内でさらなるタンク増設による保管継続や新たな処理・保管方法の検討など、あらゆる可能性について国の責任で継続的に検討・実施していくことなどを求めました。

汚染水 アルプス処理7割が未完了

海洋放出のイメージ



菅義偉政権が決定した、東京電力福島第1原発事故で出た高濃度のトリチウム(3重水素)を含む汚染水(アルプス処理水)を薄めて海に放出する方針。政府は、具体的な方法について示しなかった。

同原発では、原子炉建屋に地下水や雨水が流入することで、放射能汚染水が増え続けています。この高濃度の汚染水を多核種除去設備「アルプス」で処理した後に残るのがアルプス処理水です。アルプスは、セシウムやストロンチウムなど62種類の放射性物質を国の放出基準(告示濃度限度)未満に低減できると思われていますが、トリチウムや炭素14など除去で

きない放射性物質もあります。敷地内のタンクにためた処理後の水は約125万トンで、現在も1日1400トンの規模のペースで増えています。政府・東電は、設置済みのタンク(137万トン)が2022年秋ごろにも満杯になると見積もっていますが、タンク増設計画を示さずまま、なし崩し的に放出を決定しました。

タンクの処理水のトリチウム濃度は、1センチ当たり数十万〜数百万ベクレル(平均濃度は同73万ベクレル)。国内の原発では通常運転で発生したトリチウム水を環境中に放出しています。その際の国の基準(同6万ベクレル)を大きく超えるものもあります。

事故原発である福島第1では他の放射線の影響も考慮する必要がありますが、現在、敷地内

の地下水をくみ上げて海に放出する際には、同1500ベクレルを基準に運用しています。今回の政府方針では、処理水を薄める際、これと同じ基準で運用するとしています。これは世界保健機関(WHO)の飲料水基準(同1万ベクレル)の7分の1の濃度です。

タンク内のトリチウムの総量は現時点で約900兆ベクレル。事故前の福島第1での年間放出量は基準(管理目標値)が22兆ベクレル、実績が2兆ベクレル規模でした。今回の方針では放出の総量を「年間22兆ベクレルを下回る水準」としました。

一方、アルプスで処理した水のうち約7割は処理が未完了で、トリチウム以外の放射性物質濃度が放出基準を超えて残留していることが判明しています。これは基準を下回るまで2次処理すると政府は説明しています。